令和５年度 フランス国立パリ聾学校（INJS）との交流
～対面型とオンライン型を通して～

田中　豊大・澤口　真弓・田万　幸子・久川　浩太郎

筑波大学附属聴覚特別支援学校は、平成15年にフランス国立パリ聾学校（Institut National de Jeunes Sourds de Paris）と姉妹校協定を締結して以来、相互訪問による交流を重ねてきた。令和元年度から令和４年度にかけては、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、相互の学校を訪問することによる対面型の交流が実施できなかった。この間、オンラインによる交流を継続的に実施してきた。令和５年５月に、新型コロナウイルス感染症の位置付けが５類に移行されたことを受け、本校にパリ聾学校の生徒を招き、再び対面型の交流を実施した。さらに、11月にはオンライン交流を実施した。２度の交流を通して、生徒がさまざまな方法を工夫し、積極的に意思伝達しようとする活発な姿が多く見られた。また、２度の交流が完了した後に実施した生徒へのアンケート調査では、対面型とオンライン型の両方に良さがあることを実感していることが示された。

キー・ワード：国際交流　対面型とオンライン交流　コミュニケーション　異文化理解　外国語学習

１　実践の経緯

筑波大学附属聴覚特別支援学校（以下、「本校」）とフランス国立パリ聾学校（以下、「パリ聾学校」との交流は、平成15年の姉妹校協定の締結から始まった。平成25年度には、オンラインによる交流が取り入れられた。はじめのオンライン交流は、本校からパリ聾学校への最初の訪問時に、本校寄宿舎との間で行われた。本校寄宿舎には高等部普通科の生徒も数多く在籍していたが、寄宿舎を利用していない通学生はこの交流に参加することができなかったため、平成28年度からは放課後の時間を利用してオンライン交流が行われるようになった。これらの実践を通して、生徒の異文化理解やコミュニケーション能力の向上など、オンライン交流を活用した国際交流の効果が示唆されている。

また、令和元年度以降は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響から、現地に訪問する対面での交流を行うことができず、代わりにオンラインでの交流のみを実施している。オンライン交流を経験した多くの生徒が、事後のアンケート調査において、交流を通して外国語やフランスの文化に興味をもった、と回答する一方で、オンライン交流ではなく、実際に現地に行きたいと感じたという回答に最も高い得点が見られた（田中・澤口・田万・久川,2023）。令和５年５月に、新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが季節風インフルエンザと同等の「５類」へと移行されたことを受け、５月16日に本校にパリ聾学校の生徒と教員を招き、対面型の交流を実施した。また、11月にはコロナ禍の間も続けられていたオンラインによる交流を実施し、計２回の交流が行われた。

本稿では、対面型の交流とオンライン型の交流それぞれの実践をまとめ、参加した生徒の感想や国際交流や外国語学習に対する意識を問うアンケート調査の結果について報告する。

２　訪問交流（対面型）の実践

(1) 実施の手続き

パリ聾学校の生徒５名と教員２名が本校へ訪問することが決定したことを受け、事前に管理職や交流担当の教員で、交流の実施方法や当日の流れについて話し合った。当日の日程は表のとおりである（Table 1）。４年ぶりの対面交流になることから、国際交流について学習する貴重な機会と捉え、高等部普通科の生徒74名全員を対象として交流を行うこととした。パリ聾学校の生徒５名に対し、本校生徒の人数ができるだけ近づくように、

学年単位でそれぞれ交流内容を企画するようにした。また、各学年との交流が終了した後、部活動体験の時間を計画した。日本に根付いた文化を体験できる目的から、本校の軟式野球部の活動を体験するよう企画した。さらに、交流の最後には、寄宿舎で舎生との会食を行うこととした。

Table 1　当日のパリ聾学校生徒の日程

10:00	学校着・荷物整理
10:10	校長室訪問
10:40-12:10	高等部普通科１年生との交流
12:10-13:40	高等部普通科２年生との交流 昼食交流
13:40-15:10	高等部普通科３年生との交流
15:10-15:45	休憩・更衣
15:45-17:30	部活動体験（軟式野球部）
17:30-18:00	休憩・更衣
18:00-18:50	夕食（寄宿舎）
19:00-	終了

(2) 交流の実施

①　自己紹介カードの作成

交流のはじめに、自己紹介のためのカードを作成する活動を設けた。カードは、多人数でも見やすいように画用紙に記入するようにした。教師が、氏名、趣味、好きな食べ物、好きなスポーツ、好きな動物などの項目を例示し、生徒一人一人が任意の項目を選択して記入できるようにした。カードには、お互いに理解しやすい英語で記入するようにした。また、本校の生徒は、事前に作成しておくことで、当日パリ聾学校の生徒が参考にし、円滑に作成できるようにした。パリ聾学校の生徒は、自身の作成した自己紹介カードを携え、各学年の交流の冒頭で共通して使用できるようにした。

②　高等部普通科１年生との交流

１年生は体育館を実施場所として、体を動かしながら日本文化を体験できる企画を考えた。最初に自己紹介カードを用いて自己紹介を行った後、アイスブレイクとして、全員で鬼ごっこを行った。パリ聾学校の生徒の中には、「鬼」という日本特有の概念に興味を示し、手で鬼の角を表しながら参加する姿も見られた。その後、２つのグループに分かれ、それぞれ「日本の文化」と「日本の手話」の紹介を行った。

「日本の文化」のグループでは、けん玉やお手玉を体験したり、本校の生徒が空手をパリ聾学校の生徒に披露し、基本的な空手の動きを一緒に練習をしたりした。模範となった本校の生徒は、道着を着て演舞を行い、パリ聾学校の生徒の注目を集めた。

「日本の手話」では、クイズ形式で手の動きから意味を推測できるよう出題に工夫が見られた。生徒同士で日本の手話とフランス手話を教え合う姿が見られた。

最後に日本のポップス曲に合わせて全員でダンスを踊った。歌詞に合わせて日本とフランスの手話表現を織り交ぜた振り付けを本校の教員が事前に考え、練習動画を作成した。生徒は事前学習として動画を視聴し、練習を行った。

③　高等部普通科２年生との交流・昼食

２年生は「ジェスチャーゲーム」、「ワードウルフゲーム」、「イラスト伝言ゲーム」を行った。ホワイトボードに英語、フランス語、日本語、イラストなどを書き、相手に伝わる方法を工夫しながら、コミュニケーションをとる姿が見られた。また、タブレット端末やスマートフォンで伝えたい画像を調べて見せたり、翻訳アプリを用いたりして、ICT を積極的に活用する生徒もいた。

交流終了後、２年生の教室で昼食交流を行った。各学級にパリ聾学校の生徒が１～２名入り、会話を楽しみながら昼食をとる様子が見られた。

④　高等部普通科３年生との交流

３年生は「パリ聾学校のゆるキャラを考える」をテーマに、本校生徒とパリ聾学校の生徒が共同制作する活動を行った。

全体の企画や運営は、学年会役員（学年長、副学年長、書記、会計、議長）が中心となって進めた。司会・進行は学年長が担当した。また、日本のゆるキャラがフランスで認知されていないことを想定し、学年会役員がゆるキャラについての説明を英語で行った。説明には、事前に作成した英

語のスライドを投影し、さらにフランスの手話表現をつけて行った。

交流では、５～６人のグループに分かれて話し合いながらキャラクターを作成した。話し合いは、グループのメンバーが車座になり、中心に筆談用の模造紙を置いて行った。アイデアを出し合った後は、事前に配布された２枚の画用紙に、それぞれゆるキャラのイメージ図と、イメージ図に込めた意味やコンセプトのキーワードを英語やフランス語で書くようにした（Fig.1）。完成した２枚の画用紙をもとに、各グループ１～２分間でプレゼンテーションを行った。最後に、投票を行い、優秀賞を決定した。投票は生徒だけでなく、参加した教員も行った。優秀賞には、パリを象徴する動物であるニワトリを頭部にもち、胴体はエッフェル塔をモチーフにしてデザインされたキャラクターが選ばれた。優秀賞に選ばれたグループには、学年長から賞状が贈られた。

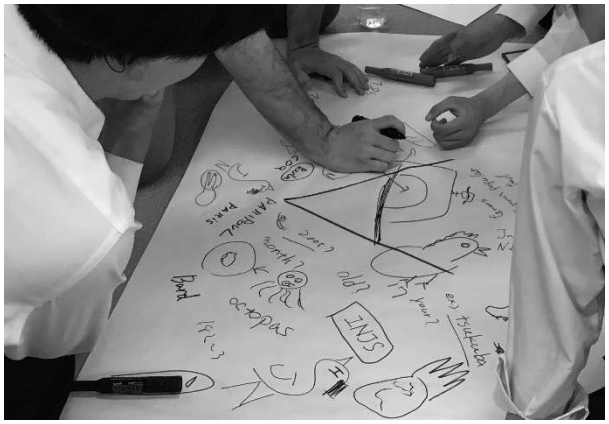

Fig.1　模造紙に書いてやりとりする様子

⑤　各学年との交流後

１年生から３年生との交流が終了した後、本校のグラウンドで軟式野球の体験を行った。軟式野球部の部員や顧問が中心となり、試合形式で交流を行った。パリ聾学校の生徒は、全員野球の経験がなかったが、ルールを知っている生徒は数名いた。本校野球部員が、ルールを英語やジェスチャーで伝えたり、利き手と反対にバットを構え得点が拮抗するように工夫して盛り上げたりする様子が見られた。また、パリ聾学校の教員も参加し、チームスポーツを通して、交流を深める様子も見られた。

軟式野球の体験後、寄宿舎での会食を行った。日中の交流では、お互いのことを知り合う時間が少なかったため、食事をしながら、お互いの学校生活や趣味について活発に話し合う姿が見られた。また、日本の食事を好む生徒や教員が多く、「寄宿舎にもっと長く滞在したい」と望む声も多く聞かれた。

(3)生徒の反応

交流でパリ聾学校の生徒と最も深く関わった３年生に感想を尋ねたところ、国際交流に対する前向きな回答が見られた。Table 2 に抜粋する。

Table 2　７月 20 日発行「高３学年だより」より

グループでの話し合いで INJS の文字とパリの名物を取り入れたキャラクターを創ることができました。パリの名物をいくつか候補を挙げながらどんなキャラを作るのかを考えながら話し合うことができたのはとても良い経験となりました。相手に伝えようと懸命にジェスチャーをして、パリ聾の生徒が大きく頷いてくれたとき本当に嬉しく感じました。お互いが分かち合えたことで初めて親密になれるのだなと分かりました。外国人と関わったことがなかった私として、パリ聾との交流という滅多にない時間を有意義に過ごせたのは非常に嬉しく思いました。
パリ聾の生徒と交流し、とても刺激的な体験になりました。まず、言葉の違いからくるコミュニケーションの壁を感じましたが、お互い英語を使いながら手話でコミュニケーションを取ることができました。フランス語も一部勉強になりました。また、文化の違いや生活環境の違いにも触れることができ、どのような魅力や習慣を持っているのか、知れば知るほど楽しく感じました。一方、フランスの手話を通して、他者と共有できる言語空間を作り出すことができたのは、交流できたからこそ得られたのだと思います。近いうちにパリ聾にも訪れてみて、生徒や先生に日本の文化をさらに教えたくなりました。

パリ聾の生徒と互いに手話を教え合ったことが初めてだったので、それが一番印象に残りました。相手の国の言語を話せなくても、手話や英語などのコミュニケーション手段を使用すれば、完全ではなくても通じ合えることができることを知りました。今回は、はるばるフランスから来てくださったパリ聾の生徒たちと初めて対面で話し合うことができて本当に良い経験になったと思います。

高等部を卒業した後も外国人との交流の機会が増えていくと思うので、国際的なコミュニケーション手段となる英語をこれからも大事に学んでいこうと思いました。

３　オンライン交流の実践

(1)実施の手続き

交流担当者がパリ聾学校の教員とメールで連絡を取り合い、時差を考慮した実施日時や、参加する生徒数、実施の方法、内容等について検討を行った上で、11 月 10 日にオンライン交流を実施することにした。

日本とフランスの８時間の時差を考慮して、日本時間の 16:30、フランス時間の 8:30 に開始し、90 分程度交流を行うこととした。本校は、放課後の部活動の時間であり、パリ聾学校は登校後から１時間目の英語の授業にあたる時間に実施した。

オンラインでは多人数でのやりとりが難しくなることや、放課後の活動であること、また３年生は進路実現に向けた学習の優先度が高まる時期であることなどを加味して、交流への参加は希望制とした。事前に希望調査を行った結果、11 名（１年生３名、２年生６名、３年生２名）の生徒が参加することとなった。これまでパリ聾学校とのオンライン交流に参加した回数は、Table 3 のとおりである。また、参加したきっかけを尋ねたところ、Table 4 に示すとおりだった。

パリ聾学校からは、８名の生徒が参加し、２名の教員が指導にあたっていた。なお、本校の教員とパリ聾学校の教員のやりとりは基本的に英語で行われた。

Table 3　これまでの参加回数

今回初めて参加する	４名
今回が２回目である	３名
今回が３回目である	４名
４回目以上である	０名

Table 4　参加したきっかけ（複数回答可）

前回参加してみて楽しかったから。	５件
先生から誘われたから。	１件
友達から誘われたから。	３件
国際交流に興味があったから	５件
その他	０件

交流の内容について、参加生徒同士で話し合い、本校の学校紹介動画を作成し、交流の冒頭でパリ聾学校の生徒とともに視聴し、その内容を基にして、お互いの学校生活や日本の文化などについて質問し合うこととした。これは、令和３年度のオンライン交流に参加した生徒が、パリ聾学校側が作成した学校紹介動画を視聴し（田中・澤口・田万・久川,2022)、本校の紹介動画も作ってみたいと立案したことがきっかけとなっている。動画は、本校での一日の生活が時系列で分かるように構成された。登校のシーンから始まり、授業の風景や昼休憩の日本の弁当文化を紹介するシーンがあり、最後に部活動を終えて下校するシーンでまとめられている。撮影は、交流に参加する生徒が分担して行い、授業風景の撮影など自身の授業に支障をきたしそうな撮影のみ教員が補助した。また、編集についても、全て生徒が行い、教員は、生徒が付けたフランス語字幕の添削と内容の確認のみを行った。

(2)交流の実施

①　機材や教室内配置

オンライン交流は、参加者全員が集まれる多目的スペースを会場とし、常設されている大型のスクリーンとプロジェクターを使用して行った。通信機器については、本校のコンピュータとパリ聾学校のコンピュータをインターネットに接続し、前年度までと同様に Web 会議システム Zoom（以

下、Zoom）を使用した。

発表者の撮影にあたっては、Webカメラを外部入力で使用した。また、学校紹介動画の上映は Zoom の画面共有機能を使って画面上に映し出した。

前年度複数の生徒から寄せられた「画面が複数台あってよかった」、「Zoom とチャットとプレゼンデータが同時に映し出されて分かりやすかった」などの意見を参考にし（田中・澤口・田万・久川,2023)、前年度と同様の教室レイアウトで実施した。発表者用のコンピュータ１台の他に、２台のコンピュータで Zoom のミーティングに参加し、それぞれを教室の後方の大型テレビに接続し、サブモニターとして使用した。また、全ての画面で、Zoom のミーティング画面、発表用プレゼンデータ、生徒が意見交換をしたり、本校とパリ聾学校の教員同士が必要な連絡を交わしたりするためのチャット画面を同時に見られるようにした。これにより、11 名の参加者が１台のモニター当たり、５～６名に分散され、画面上の情報がより細かに共有されやすい環境となった（Fig.2)。

さらに、２台のサブモニターの間には、机を配置し、その上に白紙とペン、ホワイトボード等を準備した。これにより、Zoom のチャット機能以外に手書き（筆談）による伝達方法も選択できるようにした。これは、キーボード入力が苦手な生徒や手話や身振り・表情を文字情報と同時に伝えたいと考える生徒のニーズに対応するためである。

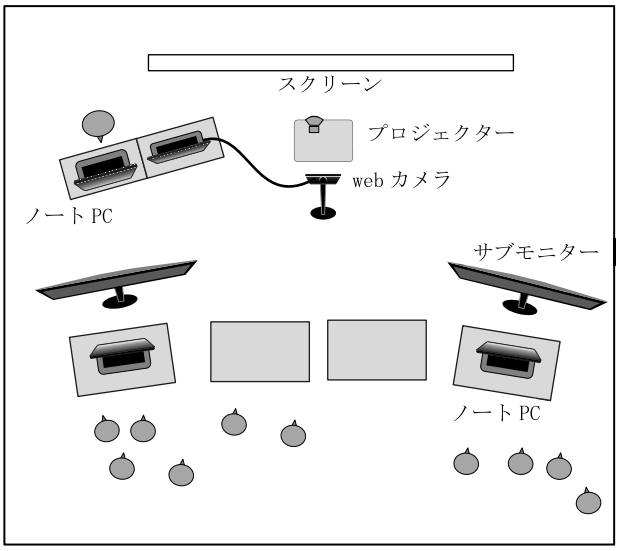

Fig.2　教室内の配置

② 交流の内容

はじめに、簡単に挨拶をし、本校の学校紹介動画を上映した。視聴し終えたパリ聾学校の生徒から、「Your school is too big.（あなたたちの学校はとても大きいね)」という感想が話された。また、昼休みに体育館でバレーボールをして遊んでいる様子を見て、「For sport Lesson you have all the same t-shirt and short?（スポーツをするときにみんな同じ服を着るの？)」「Why do you have all the same clothes?（どうしてみんな同じ服を着るの？)」「In France, we can wear everythnig we want.（フランスではみんな好きな服を着るんだよ。)」という質問がされた。この質問に対して、本校生徒同士で話し合い、「That’s right. Because it is Japanese culture. Japanese students have to wear same clothes because it is determined by school regulations.（そうだね。それは日本の文化だからだよ。日本には同じ服を着ることが校則で決まっているんだよ。)」と説明していた。一人の生徒が全て答えるのではなく、友達の発言に対して、一文ずつ補足し、複数の生徒で協力しながら回答していた。また、本校の生徒からも「What do you like about Japan?（日本で何かいいなと思うものはある？)」と質問し、パリ聾学校の生徒からアニメやアイドルを例示して回答する場面があった。これに対して、本校生徒が和名を全てローマ字で表して伝えようとしたが、パリ聾学校の生徒の反応があまりなかったため、手元のタブレット端末やスマートフォンで検索し、タイトルや登場人物の名前を英語で示して見せるなど工夫する姿が見られた。また、絵を描くことが得意な生徒は、その場で簡単なイラストを描き、お互いのイメージを一致させる取り組みも見られた。他にも、時差について話題提供したり、好きな日本人とフランス人のスポーツ選手などについて質問し合ったりたりする場面もあった。

交流中は常時チャットを画面右側に表示することにより、行われているやりとりを参加者全員がリアルタイムで共有できるようにした（Fig.3)。本校生徒は、パリ聾学校の生徒とのやりとりに、

Zoom のチャットや手話、筆談、身振り等を組み合わせながら伝え合うことができていた。生徒一人一人が自分に合った手段を選択し、相手に分かりやすいように工夫して伝える様子が見られた。

Fig.3　ミーティング中の画面

交流の結びに、パリ聾学校の生徒からサインネームを紹介し合いたいという提案があり、一人ずつサインネームを紹介した。フランス手話やアメリカ手話の指文字で本名を伝えてから、サインネームを表した。指文字による情報は、動画の画質や生徒の読み取りの力を考慮し、教師がチャットで名前を入力文字化して情報を補うようにした。

最後に画面上のプリントスクリーン機能を利用して記念撮影を行い、終了した。

４　アンケート調査結果

オンライン交流実施後、５月の対面交流と 11 月のオンライン交流の両方に参加した生徒を対象として、Microsoft Forms を使用した選択式及び記述式の電子アンケート調査を参加者に実施した。選択式の質問は８項目で、それぞれの項目について、「とてもそう思う」「そう思う」「どちらでもない」「そう思わない」「全くそう思わない」の選択肢から回答を求めた。結果は次のようになった。

(1) 準備や当日の評価を問う質問

事前の準備や交流当日の動きについてTable 5に示すような質問をしたところ、Table 6に示す結果となった。また、交流の感想について尋ねるために、「印象に残ったこと」、「うまくいったこと」、「うまくいかなかったこと」について、それぞれ自由記述で回答を求めた。

Table 5　質問項目

①	準備や練習の時間がもっとほしかった。
②	交流相手に分かるように工夫できた。
③	交流時間（約 90 分）は短かった。

Table 6　回答結果（n=11）

（人）	①	②	③
とてもそう思う	0	4	4
そう思う	0	6	4
どちらでもない	10	1	3
そう思わない	1	0	0
全くそう思わない	0	0	0

②の項目については、回答した理由や具体例を自由記述で求めたところ、チャットや身振り、イラスト、ホワイトボードでの筆談などによって相手に分かりやすいように工夫して伝えることができたから、という趣旨の回答が多く見られた。

「今回の交流で印象に残ったこと」について自由記述で回答を求めたところ、日本のアニメや漫画の文化がフランスに浸透していることへの驚きを示す回答が多数見られた。また、フランスの手話表現を教えてもらえて嬉しかったという回答も見られた。

「今回の交流でうまくいったこと」を問う質問に対しては、学校紹介動画で本校の日常生活を知ってもらえるきっかけになりよかったと回答する生徒が多かった。また、言葉で伝えることが難しい場合には、イラストなどで例を示すことにより、共通理解がしやすくなるという気付きを書く生徒もいた。

「交流でうまくいかなかったこと」を問う質問では、自分の話したいことを積極的にチャットや筆談などで発信できなかった旨の記述が、初めて参加した生徒から散見された。また、コミュニケーションに必要な自身の英語力が不足していることを顧みて、日頃の言語学習に対して意識が高まった、という記述も見られた。

(2) 外国語学習や国際交流への意識を問う質問

交流前後における外国語学習や国際交流への意

識の変化について Table 7 に示す質問をした。結果は、Table 8 のようになった。

Table 7　質問項目

④	今回の交流を通して、外国語でのやりとりに興味をもった。
⑤	今回の交流を通して、外国語をもっと学習したいと思った。
⑥	今回の交流を通して、フランスという国や文化に興味をもった。
⑦	今後も国際交流の機会があれば取り組んでみたい。
⑧	オンライン交流ではなく、実際にフランスに行って交流したいと感じた。

Table 8　回答結果（n=11）

（人）	④	⑤	⑥	⑦	⑧
とてもそう思う	6	5	7	7	6
そう思う	4	4	2	3	4
どちらでもない	1	2	2	1	1
そう思わない	0	0	0	0	0
全くそう思わない	0	0	0	0	0

(3) 交流方法についての質問

「交流の方法として、対面型とオンライン型ではどちらがよいと思いますか」と問いかけたところ、Table 9 のような結果になった。また回答の理由を自由記述で求めたところ、「両方が良い」、「対面型がよい」と答えた生徒から、それぞれ Table 10、Table 11 に示す記述があった。

Table 9　回答結果（n=11）

対面型がよい	２名
オンライン型がよい	０名
両方がよい	９名

Table 10　「両方がよい」の理由（自由記述）

オンラインでは対面よりも多い人数で交流をすることが出来る。対面では直接手話を立体的に見ることが出来て、交流しているという実感が深い。それぞれにいい面があるため両方。
オンラインでは気軽に参加できるし、対面だと会話するにはどうすれば良いかを考える機会になるから。
オンラインでしかできないこともあるし対面型でしかできないこともあるから両方やるべきだと思う。(多数)
それぞれに良さがあって、会えないからこそコミュニケーションを取る楽しさを感じれるし、対面だと顔を直接見て間近で交流ができるから。
対面だと表情なども見やすく、コミュニケーションの幅が広がるし、オンラインだと落ち着いた交流ができ、どちらにも特有のいい点があるから。

Table 11　「対面型がよい」の理由（自由記述）

両方が良かったが強いて言えば、直接交流した方がスムーズにコミュニケーションを取れてアイコンタクトもできて伝えやすい。誰が何を尋ねているのか、などの周りの行動を正確に把握できる。
実際に会うとき、どうコミュニケーションを取ればいいのかを考えることができるから

(4) 今後の交流についての質問

「次にパリ聾学校と交流するとしたら、どのようなことを行いたいか」という質問に対しては、以下のような回答が見られた（Table 12）。

Table 12　回答例（自由記述）

パリ聾の学校生活も見てみたい。実際に行って文化を知りたい。(多数)
思い出になるようなものを一緒に作って形に残る何かをしたい。
みんなと一緒にスポーツ試合をしたい。わざわざ言葉で説明しなくても世界共通スポーツであればルールを元から知ってるのでやりやすいため。時間がかからないし楽しめるから。スポーツを通してコミュニケーションを取れるのでやりたいと思った。
食べ物に関する話をしてみたい。フランス料理に興味があるので色々知りたいと思った。
パリでの部活動を体験してみたい、パリの手話講座も行いたいと思った。2025 にデフリンピックがあるから、そこでたくさんの外国人にも会うので外国の手話を使ってコミュニケーションを取りたいと思ったから。

５　考察と今後の展望

令和５年度、対面型の交流が再び実現した。最後に対面型の交流を経験した生徒はすでに卒業しており、現在高等部普通科に在籍する生徒たちは、新型コロナウイルス感染症の影響により、対面型の交流経験は一切なく、オンライン型の交流のみを繰り返し経験してきた。卒業した上級生から、在籍時にパリ聾学校へ訪問した際の写真を見せてもらったり、体験談を伝え聞いたりすることに留まっていた。コロナ禍では、オンライン交流を行う度に、生徒から「実際に会って交流したい」という思いが質問紙に書かれていたため、今年度対面による交流が実現したことで、オンライン型に対して否定的な意見が増えるのではないかと予測された。しかし、実際に、対面型とオンライン型の両方を経験した生徒からは、「対面型とオンライン型の両方に良さがある」という回答が大多数を占める結果となった。これは、自由記述の回答などから、対面だからこそできることと、オンラインだからこそできることの理解が生徒の中で深まっているのはないかと思われる。また、それぞれの場面や方法に応じて、相手に伝わりやすい方法を想像し、工夫する力も高まっているのではないかと思われる。

さらに、パリ聾学校との交流を通して、外国語学習への意欲の向上にも繋がることが示唆された。身振りや表情などを活用した非言語的コミュニケーションの重要性とともに、外国語を相手との共通のツールと捉え、場面や状況に合わせて適切に使うことへの意識が、生徒の中で今後もいっそう高まっていくことを期待する。

新型コロナウイルス感染症が５類に引き下げられ、対面での交流が比較的実施しやすくなったが、今後もオンライン型の交流を併せて行うことにより、国際社会をより身近なものと認識し、国際交流のための有用な選択肢の一つとして捉え、指導を継続したい。

〔付記〕

本研究は筑波大学附属聴覚特別支援学校研究倫理審査委員会の承認を受けて実施されている。

〔参考文献〕

田中豊大・澤口真弓・田万幸子・久川浩太郎(2023)令和４年度フランス国立パリ聾学校(INJS)とのオンライン交流.筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要.45,95-100.

田中豊大・澤口真弓・田万幸子・久川浩太郎(2022)令和３年度フランス国立パリ聾学校(INJS)とのオンライン交流.筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要.44,65-70.

久川浩太郎・澤口真弓・荒川郁朗・福地陽・石井清一(2020)令和元年度フランス国立パリ聾学校(INJS)訪問交流の報告.筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要.42,102-107.